The Japan Association of College English Teachers

【月例会】

英語会話と私

田崎清忠（横浜国立大学名誉教授）

1. 英語会話との接点

私の英語会話との最初の接点は米国留学であった。フルブライト法（Fulbright and Smith-Mundt Act of 1948）による留学以外にアメリカで勉強する手段がない時代なので競争は激烈であり、合格の確率は数十倍と言われた。

幸運にも試験に合格した私は、漠然と「英語が出来れば会話は出来る」と思っていた。しかしアメリカの土を踏んだ途端に、どうやらこの理解は誤っているらしいと気がついた。つまり、「日本人にとっては、英語と英語による会話は別らしい」と感じ始めたのであった。たとえば、「ライターの石」を買いにドラッグストアに行ったとき、lighter stone ではなく flint という単語を知らないことに動揺したのだった。また、ホテルのレストランでウエイトパーソンが "Would you like some coffee, sir?" と尋ねるのに対し、町のダイナーではウエイトパーソンが "Coffee?" と言う。同じ状況で異なる表現が使われる register（言語使用域）について、自分はほとんど何も知らないし意識したことさえなかったことに気がついた。そして得た結論は、

「学校英語的英語力には限界がある」

ということであった。

2. NHKテレビ英語会話番組

(1)「英語番組」

NHKテレビ番組講師になったのは1961年で、留学から帰国して4年目であった、教育テレビが始まったのは1959年のことであり、まさに放送開始後3年目――教育テレビ創世期であったことになる。当時NHKはテレビの英語番組3本を放送しており、いずれもアメリカ人を講師にして日本人のアシスタントが解説役を担当するという方式をとっていた。3本のうち1本は、この役割分担を逆にして、日本人講師＋アメリカ人アシスタントにしようという案が出て、30歳の田崎に白羽の矢が立った。おそらく、「アメリカ帰り」で英語が出来る、ミシガン大学で視聴覚教育を学んできたので「テレビの機能を活用した英語プログラム」を考え実行してくれる可能性がある、（それに）若くて一見見栄えがするので「テレビ的なセンセイ」が勤まるかもしれない……などが委嘱の理由であったと後日聞いた。しかし、教育実験的な意味合いもあって担当を引き受けた田崎には「大きな悩み」が待ち受けていた。

① 英語番組としての悩み

(a) 公教育との違い

公教育としての学校教育にはカリキュラムがあって、目的・目標に沿った教育内容が決められている。「学校放送」における英語番組は、ほぼこのカリキュラムを下敷きに構成す

NII-Electronic Library Service

The Japan Association of College English Teachers

ることが出来るが、田崎が担当する番組は「社会教育」のジャンルに属し、故に頼るべきガイドラインが存在しない。

カリキュラムを作るには、学習者が

現在どのような学力を持っているか

学習の目的は何か

目的を果たす為の到達目標をどこにおいているか

の3点を踏まえた needs analysis を行う必要があるが、NHKにはそのような基礎的調査資料がないし、あらためて調査を行う仕組みも考えられない。つまり、担当する講師が自分で考えたカリキュラムによって番組を作ることになる。これが最大の悩みになった。

(b) どんな英語を教えるか

社会教育的英語番組であっても、基本的には英語教育であることに変わりがない。だとすれば、4領域・4技能のバランスを取った番組構成が必要であると考えた。しかし、テレビというメデイアの範疇で、30分という時間的制約の中で、いったいどのように番組を作ったらよいのだろうか。

一口に「英語」と言っても、spoken vs. written の区別に始まり、formal vs. informal, colloquial, substandard, vulgar まで種類はさまざまある。アメリカ語を材料にするのであるから、もっとも広く受け入れられている General American を対象とする結論には問題がない筈であるが、上のような多種多様な分類のどの部分を教材化すべきか。番組収録3ヶ月前には完成してテキスト編集部に原稿を渡す時期の大きな悩みになった。

② テレビ番組としての悩み

(a) 音声と映像の組み合わせ

会話は音声、提示方法たるテレビは映像・・・この二つをどう組み合わせるかが次の悩みとなった。田崎は、当時まだ日本ではあまり知られていなかった視聴覚教育をミシガン大学留学中に学び、帰国後「英語科視聴覚教育」(大修館、1960) を出版していた。しかし、理論的な知識があっても、実際のテレビスタジオで駆使される技術面について、何が可能で何が不可能かを知らない。音声だけに依存するラジオ番組の方が「はるかにラク」などと安易に考えるほどであった。テレビが視聴者に送り届けることの可能性を熟知していなかったからである。

(b) アシスタント選び

講師は日本人、アシスタントはアメリカ人という方式。では、アシスタントにはどんな人をどのように選ぶのか。これが次の課題となった。アシスタント探しについては、NHKが中心となってあらゆる情報のチャンネルを用いて実施することになった。見付かったアシスタント候補者はテレビカメラの前で面接し、その結果をデイレクターと協議して採用か不採用かを決めた。私が採用基準としていたのは次のような条件であった。

女性であること――講師が日本人男性なので、バランスを取るため。

美人であること――ラジオと違うので、映像があるテレビでは、美人の方が見ていて楽しい。ただし、美人過ぎてはいけない。当時フランス語講座にモレシャンさんが出演していたが、あまりの美しさに見とれて勉強がすすまないという弊害(?)があった。

英語は General American――南部訛りやニューヨーカーの早口英語は、出来れば避け

NII-Electronic Library Service

The Japan Association of College English Teachers

たい。

教養があること――アシスタントには英語のモデルとなってもらう仕事の他に、フリーな会話の場面で informant の役割も果たしてもらわねばならない。講師がいちいち質問と答を「仕込む」ようなことになれば、当選自然さが損なわれる。

人柄がよいこと――テレビは「人柄を映し出す」不思議な力を備えている。ふと微笑んだ時の表情に出演者の性格的背景が見え隠れする。

これらの条件をすべて満たすアシスタント選びは、決して楽なものではなかった。しかも田崎は、「視聴者はさまざまな英語に触れる必要がある」との conviction を持っており、アシスタントは3ヶ月ごとに交代させるべきであると主張した。「首切りの宣告」は講師の役目であったが、しばしば "Did I do anything I offended you and the NHK people with?" と涙ながらの訴えを聞くのも辛い仕事になった。しかし、この方式はさすがに続かなかった。NHK は絶えずアシスタント探しをしなければならなかったから。

(c) 講師としての自己改造

カメラに向かって笑顔で語りかける……これは口で言うほど簡単ではなかった。自分の前にあるのはカメラではなく、茶の間でテレビに向かっている視聴者であると自分に信じ込ませる――つまり「自分を騙す」――ことが出来るようになるのには時間を要した。

画面に登場する講師がいつも同じ洋服で同じネクタイをしているのはまずいと考えた。服装に気を遣い始めた。また、常に調髪し clean-cut のイメージを保つ努力をした。

何よりも「言葉遣い」に気をつけた。英語番組であっても、かなりの部分で日本語を使う。その日本語に品位がなかったり、正しくなかったりすれば、広い意味で語学教師としては失格である。まず「NHK アナウンサー読本」を入手して、テープを聴きながら「標準とされる日本語」の練習をした。視聴者からは遠慮ない指摘が届く。「あなたの日本語は子音の発音が鋭すぎる」「『しゃべる』という日本語は正しくない。なぜ『話す』と言わないのか」などなど。田崎は画面に向かって「みなさん、こんにちは」と決して言わなかった。テレビに向かっている視聴者は個人であって、「みなさん」ではないと考えたからである。

(d) テレビ番組の可能性を追求

放送用のテキスト執筆にあたっては、「場面の構成」についての配慮を避けることができない。「居間における会話」はスタジオでも可能であるが、「タクシーの中での会話」はロケーションに頼らざるを得ない。つまり、収録上の技術的な制約を無視してテキストを書くことは許されないことになる。番組制作予算や制作日程の問題にも波及する。

現在の語学番組の多くは、外国で制作された番組を解説し練習するという方式をとっている。つまり、視聴者は完全に「第三者的立場」に置かれていることになる。モデルをまねるという語学習得の基本からは外れていないものの、視聴者が「自分の姿」を意識することは困難である。田崎は、「自分が視聴者の身代わりになる」という基本姿勢を作り出し、それを貫いた。番組の中で、講師は理容師、駅員、医者、外交員、電話交換手などあらゆる職種を自ら演じてみせた。パネルの前に立って解説するだけの講師と比べると、講師にかかる負担は劇的に増大した。

(e) アメリカ取材

テレビには画面がある。アメリカの話をしていても画面は日本……これは許されない。

NII-Electronic Library Service

The Japan Association of College English Teachers

会話に登場する諸々の事物は、アメリカから持ち帰って画面で示す必要がある。社会が時々刻々変化するのは、日本も米国も同じ。だとすれば、常にもっとも新しいアメリカの姿を提示するためには、頻繁なアメリカ取材を続けるしかない。こうして講師のアメリカ取材旅行が始まった。毎年夏休みのほとんどをアメリカですごし、人と語って最新のアメリカ事情を学び、新しい言語表現を聴きとり、日本には知られていない事柄を音と映像に収録して持ち帰った。7-ELEVEN や Drive-Thru などの仕組みは、その情報そのものがテレビ番組で次々に紹介された。重い「デンスケ」(携帯用録音機で最大15分をリールに録音できる) とカラーと白黒用のカメラ2台を担いで、アメリカ50州のすべてを駆け巡った。

ここで与えられた紙数が尽きた。この後講演では

2. (2) 英語会話番組

3.「英語会話力」を支えるもの

について語られた。本要旨を纏めるにあたって、全体を網羅的に薄く記述するか、それとも出席しなかった読者にある程度「語り口」も含めて読み取っていただくか、どちらにするかを考えた末、結果的に後者を選んだ。ここに述べられていない後半については、出席された学会の会員の皆様からお聞きとりいただきたい。なお、番組制作についての裏話は田崎のホームページ (http://kiyofan.com) 内のブログにも詳細な記載がある。

[講師略歴]

横浜国立大学名誉教授。元東京純心女子大学学長。専門は英語教育学とアメリカ研究。1961年より16年間「NHKテレビ英語会話」講師。構造主義言語学と視聴覚教育を応用してNHK語学番組の基本的フォーマットを構築した功績により、放送文化基金賞受賞。また、2010年秋の叙勲で「瑞宝中綬章」を綬章した。現在は日本学生協会基金筆頭理事、NPO法人海外文化センター理事長。

NII-Electronic Library Service